

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520248

研究課題名（和文） ディケンズの速記的造形術とヴィクトリア朝文化

研究課題名（英文） Dickens' Stenographic Characterization and the Victorian Culture

研究代表者

松本 靖彦（MATSUMOTO YASUHIKO）

東京理科大学・理工学部教養・准教授

研究者番号：10343568

研究成果の概要（和文）：本研究補助金を用いて遂行した資料（史料）調査に基づき、研究代表者はチャールズ・ディケンズの想像力の特徴を、彼が作家として成功する前に習得した速記とのアナロジーを鍵として分析した。その結果得られた発見を作品論や作家論の形で論考にまとめ、そのいくつかを学会での口頭発表や学術誌掲載の論文として発表することができた。また研究過程で得られた知見を活かした翻訳作品も発表することができた。本研究によってディケンズならびにヴィクトリア朝文化研究に独自の貢献ができたものと思われる。

研究成果の概要（英文）：Making use of the literary and historical resources that this research project has given me access to, I analyzed the characteristics of Charles Dickens's imagination using the analogy between it and stenography which he taught himself before he became a successful novelist. In the course of this research, I wrote several essays on Dickens's novels or on Dickens the novelist. Some of them were published on academic journals (I read one of them at a conference). My findings through this project about the cultural background of Dickens's writings helped me to finish translating one of his short pieces. I believe I have managed to make a unique contribution to the Dickensian and Victorian studies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ディケンズ・想像力・速記・ヴィクトリア朝

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

(1) ディケンズが優れた速記者でもあったことはよく知られていたが、速記と彼の想像力との関わりを的を絞った考察や分析は断片的な言及以上のものは皆無に近かった。研究代表者は 2000 年前後からディケンズの著述全般に見られる文字や記号のある種奇矯な振る舞いには彼の想像力の重要な部分が関わっているのではないかと考え始めていたが、当初はアルファベットという観点から考察を進めていた。

(2) 大きな転換点はディケンズと 18 世紀の画家ホガースとの人物造形を比較して分析したことである。両者の巧みな人物造形は、瞬時に外的特徴をつかみとる速記的転写術にあると思いついたときから、研究の焦点を「速記」に絞った。2005 年には研究代表者とは異なる観点から「ディケンズと速記」という主題に着眼した海外の研究者が現れたが、この観点からの研究は概ね未開拓の分野だった。

2. 研究の目的

本研究は以下の二点を目的とした。

(1) 速記とディケンズの想像力との間のアナロジーを鍵として、彼の想像（創造）力の源を解き明かすこと。

(2) 「断片」が「全体像」へと膨らんでいくという傾向が、ディケンズだけでなく、ヴィクトリア朝の社会や文化に通底したものであることを例証すること。

3. 研究の方法

本研究は特定の理論的立場に立脚したものではない。本研究遂行過程で発表した論考の中には精神分析理論を援用したものもあるが（‘Dickens via Freud and Deleuze: “Fort”-“Da” Games and Vacillations in *Our Mutual Friend*」5. 項参照）、本研究は、基本的には速記とディケンズの想像力とのアナロジーを鍵とした考察であった。

4. 研究成果

(1) 本研究最大の成果は、速記との対比からディケンズの想像力の特徴を分析し、記述することに成功したことである。

まず本研究の前半（2008～2009 年度）においては、彼の想像（創造）力の源を解き明かすことを目指した（2. 研究の目的(1)参照）。

あらゆるディケンズ作品（小説以外のジャ

ーナリズムを含む）の分析は彼の叙述がもつ二つの側面を扱わねばならない。即ち、いわゆる「リアル」に観察した対象を写しとる側面と、断片的な特徴が全体像に膨れ上がっていく側面である。本研究は、この二面はディケンズが作家になる前に習得した速記術のもつ二つの働きと類似していることを明らかにした。

本研究はさらに、このような速記術の二つの機能が彼の人物造形の比喩になり得ることを示した。より具体的に言えば、①境界線を越えて「写す（移す）」（＝「写し」を増殖させる）という速記術の機能、そして②速記の読み取りに伴う「ちょっとしたしるし」が概念やイメージに化けるプロセスが、彼の人物造形の手法に似ているのである。

①「写す（移す）」ことについていえば、彼は人物の外的特徴を模倣する能力に卓越していたらしいが、これは眼で見た情報を即座に自らの身体に写し取る生身の速記術に他ならない。また、彼の娘メイミーの証言によれば、ディケンズは執筆中、鏡の前で自分の小説の登場人物を演じながら描写していたらしい。彼は自分の身体→鏡像→小説へと「(境界)線を越えて」情報を「写し（移し）」て人物造形をしていたのである。

②一方、断片的な外的特徴を人物の全体像へと膨らませていくことの多いディケンズの人物造形が、点やひっかけ傷のような「ちょっとしたしるし」を概念やイメージに翻訳する速記の読み取りと、質的に同じ作業であることは言うまでもない。彼の想像力は時にテキストのごく周縁的な部分において、爆発的と言ってもよいほどの奔放なイメージ生成をしてみせる。イメージが咲き乱れ繁茂するようなその様子には、ディケンズの想像力のもつ奔放だが生き生きとしたエネルギーが表現されている。この点は、本研究補助金によって閲覧、調査が可能になった 19 世紀イングランドの速記や装飾文字に関する史料によって直に確認することができた。

(2) 本研究が取り組んだ速記とディケンズの（特に人物造形における）想像力の働きとの対比は、彼が見る世界が生命に満ち溢れていることをアニミズム以外の理由で説明する鍵を与えてくれた。これは世界的にみても珍しい着眼点であり、本研究代表者が表音文字と表意文字を日常的に併用する文化圏に属していることと関係があるかもしれない。この点に関しては尚考察の余地があるが、英語圏にはあまり例のない、非英語圏の研究者ならではの独自の発想で世界の英文学研究に貢献できたと思われる。

(3) 彼の芸術全てに通ずる鍵を探索した先行研究は、その鍵を彼が読者との間に求めた親密な絆や、演劇性の内に見出してきた。一方、本研究は、その鍵をディケンズの想像力の特質としての「速記的造形術」の内に認めた。それは小説執筆だけでなく演劇、公開朗読という多分野にまたがる彼の芸術すべてに共通する彼の想像力の働き方への理解を深めてくれた。

彼の「速記的造形術」が最も端的に表現されているのは『大いなる遺産』冒頭であろう。その場面で孤児ピップは墓石に刻まれた両親の名前の字面から二人の姿を取り出してみせている。ピップは、いったんは文字を文字として読みながら、同時に文字の *physiognomy* (表情) を見て取り、それを人物像に膨らませている。このように断片的特徴から人物像が生まれる傾向を、本研究は「速記的造形術」の一特質として捉えた。

ディケンズの想像力の特質を「速記的造形術」という概念にまとめた途端、それと細部から全体像を再構築する“*detection*”の眼差し(例えば医者や探偵のそれ)との類似性が浮き彫りになり、それは取りも直さずヴィクトリア朝の古生物学、犯罪捜査、医学(解剖学)、探偵小説、歴史学に共通してみられるものであることを指摘することができた。結果として、ディケンズの想像力が特異なものではなく、ヴィクトリア朝文化や社会と通底したものであったことを示唆することができた。

(4) (3)の成果は主に(1)の②でみた、断片的特徴が全体像へと膨らんで行くというディケンズの想像力の側面に着目したところからもたらされた。本研究の後半(2010~2011年度)においては、(1)の①でみた「写す」という速記的造形術の機能をディケンズ作品世界の登場人物間で展開するドラマの分析に応用を試みた。彼らが非常に繊細に互いの思いや考えを読み取る様子から、速記による転写と同様、人間関係においても「写し」が生まれるのだと思い至った。

他の人間の心情を察するということが自体、自他の領域の垣根を越える思いを発動させているわけだが、それはその人間の立場に身を置いてみる、つまり自分の視点を一時的に別な人間の内に「移す」ことに他ならないともいえるし、また自らの内に相手の思いを「写し」取ろうとしているのだ、ということもできる。他の人間の意向を気遣うことやその内面を読み取ることは、自他を隔てる境界線を越えて想像力を働かせることであり、そこには必然的に誰かの自我や思いの「写し」が生まれる。自分の思いの「写し」が別の人格の姿をとったとき、それはその人の「分身(もうひとりの自分)」となる。

このように速記の「写す」機能と登場人物の心理の動きとの間の対比によって、本研究は文学研究としての新たな展開を迎えた。自己の「写し」の増殖という観点から『クリスマス・キャロル』、『大いなる遺産』、『ドンビー父子』等のディケンズ作品を分析することによって、以下の二点が浮き彫りになった。

①自分という領域を越えたい(自他の領域の境界線を越えたい)という欲望は個の中に封じ込まれた(特に近代以降の)人間にとって根深いものであること。

②相手の気持ちを慮ったり、思いやったりすることは、多かれ少なかれ相手の自我の写しを自分の内に所有すること、あるいは相手の心の内に自己の写しを埋め込むことであり、それはいずれにしても原理的には侵犯につながる可能性があること。

(5) 本研究では、当初の計画ほどディケンズとヴィクトリア朝の他の作家や文人との比較ができなかった。特に線を描くことやスケッチの観点からの先行研究があるサッカーとの比較に考察が及ばなかったのは残念である。また本研究で扱った文学作品のテキストは散文に限られていたが、詩も考察対象にすべきであった。「速記的造形術」の発露が散文に限られている必然性は特に見出せないからである。さらに一見、ディケンズと毛色の異なる作家、文人、詩人の著述も分析対象に含めることができれば、研究の視座も広がるし、より幅広い *textual evidence* も得ることができ、本研究の成果の説得力も高めることができると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① Yasuhiko MATSUMOTO, 'Affectation and Laughter in Dickens' *Great Expectations*, 『東京理科大学紀要(教養篇)』査読有、第41号、2009、405-422

② 松本靖彦, 「見世物小屋としての『骨董屋』と人形の死に様」、『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』、査読有、第32号、2009、4-17

③ Yasuhiko MATSUMOTO, “Dickens via Freud and Deleuze: “*Fort*”-“*Da*” Games and Vacillations in *Our Mutual Friend*”, 『東京理科大学紀要(教養篇)』、査読有、第42号、2010、143-158

④ 松本靖彦, 「いずれは死なねばならぬから—フロイトの『快原理の彼岸』とディケンズ」

『多元文化』、査読有、第 11 号、2011、67-78

⑤Yasuhiko MATSUMOTO、‘Moving Out of the Frame: Portrait Painting in “My Last Duchess,” “Jessica,” and *La Belle Noiseuse*’, 『東京理科大学紀要（教養篇）』、査読有、第 44 号、2012、57-73

〔学会発表〕（計 1 件）

①松本靖彦、「見世物小屋としての『骨董屋』と人形の死に様」、日本英文学会第 81 回大会（於東京大学）、2009 年 5 月 31 日

〔図書〕（計 1 件）

①松本靖彦、「小人のチョップス氏」、小池滋、西條隆雄編、『ディケンズ朗読短篇選集（II）』、開文社出版、2012、195-214

〔その他〕

ホームページ等

(1) 5. の②に関して

<http://www.dickens.jp/archive/ocs/ocs-matsumoto.pdf>

(2) 5. の④に関して

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/tagen/tagenbunka/vol111/06.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本靖彦（MATSUMOTO Yasuhiko）

研究者番号：10343568